



Photography by Hitoshi Kadowaki



浜辺に打ち寄せるもの

ビーチコーマーの自然誌

門脇 仁

地球環境リテラシー 2

かどわき・ひとし 1961年生まれ。慶応義塾大学文学部卒、パリ大学応用人間環境学科修士課程修了。出版社、シンクタンクを経て、1998年よりフリーの環境・科学ジャーナリスト、翻訳家。著書・訳書に『熟練技能をナレッジ化せよ』（日刊工業新聞社、2004年日本ナレッジ・マネジメント学会研究奨励賞受賞）、『終りなき狂牛病——フランスからの警鐘』（緑風出版）など。Mail: jin.k@cello.ocn.ne.jp

いわくありげな漂着物

大きな廃材が浜辺に打ち寄せられるのを見たことがある。どことなく沖に後ろ髪を引かれる感じであつた。流木はゆっくりと遠浅の海岸に流れ着く。小魚や海藻にまじって、どこからきたのかわからないものも打ち上がってくる。海岸はいわくありげな漂着物でいっぱいだ。

三年前の八月には、石垣島のヤシの実が伊良湖岬に流れ着いた。これは石垣市（沖縄県）と渥美町（愛知県）の協力による漂着実験で、スタートから一四年間に流された九四個のうちのひとつだつた。黒潮に乗って南方文化が伝来したという柳田国男の説をもとに、島崎藤村が「椰子の実」の詩を書いてから約一世紀後の出来事である。

漂着物に心ときめくものを感じるのには、われわれ日本人だけではないだろう。「私の耳は貝のから／海の響きを懐かしむ」と歌ったコクトー。また南太平洋には、大陸から海を渡った先祖たちの思いを漂着物に重ね合わせた歌やダンスがある。

かつてミクロネシアの島々を流浪しながら、海岸線で生計を立てている人々がいた。手工芸品で外貨を稼ぐため、材料のサンゴや甲骨を拾う人。定期便の荷役を引き受ける人。彼らは「浜辺を掃く人」と呼ばれた。それがビーチコーマー（Beachcomber）の由来である。

いまは欧米を中心に、調査研究、アートや趣味といった目的で漂着物コレクションをする人たちがこう呼ばれている。今日も世界中のビーチコーマーが、足もとの浜辺と彼方の海とのつながりを見ている。漂着物たちが語るロマンと現実。その

両方に目を向ける人は、やがて海洋メッセージの渉獵者となる。逆にいずれか一方しか見ていないと、生態系の現状とあるべき姿とを包摂しにくいのではないだろうか。

今回は、「浜歩きの人」である二人の人物を訪ねた。漂着物はどんなメッセージをわれわれに伝えようとしているのか。それを読み解くリテラシーを探ってみよう。

一片の貝殻にも膨大な記号情報

福岡県宗像郡は、荒波で知られる玄海灘の沿岸地である。北上する黒潮の分流が対馬暖流に変わり、北からはリマン海流が朝鮮半島にぶつかって南下してくる。春には黄砂やメイ・ストームも吹き寄せる。

こうした条件が重なり合って、ここは環日本海から運ばれる漂着物の宝庫となっている。ことに

一〇月から三月までは、日本海の強風と波がありとあらゆるものを運んでくる。これに対し太平洋岸では、春と夏がビーチコミングの季節といわれる。

この玄海沿岸の浜歩きで知られているのが、漂着物をこよなく愛し続けてきた石井忠氏だ。福岡県生まれの石井さんは、中学・高校の教諭を経て、いまは近隣の古賀資料館で館長を務めている。三六年間にわたる漂着物コレクションは数えきれず、収集テーマは多彩をきわめる。魚貝類、骨、種子、果実、漂着瓶、生活用品、人形、お面等々。石井さん宅の倉庫は、きらめく「センス・オブ・ワンダー」の小宇宙である。

「ものへの執着心が強いんでしょうね。どんな漂着物でもつまらんものとは思えんです。まずそれを見つけたこと自体に偶然の面白さがある。興味をもって調べていくと、たくさんの人に出逢う。そのあいだにも、次の漂着物から新しいテーマがもらえる。毎日が楽しくてしょうがないですよ」

ひとかけらの貝殻や石にも、南洋産のオウムガイと同じく膨大な情報がある。味わい深い発見がある。大学（国学院文学部）時代に考古学を専攻した石井さんは、文献やヒアリングでつぶさにその情報を集め、漂着物がたどってきた海の道を再現する。漂流の起点と終点は、むしろ単純な線ではないでいく作業だ。その謎解きを石井さんは「執拗な犯人捜しみたいなもの」という。

犯人捜しといえば、シャーロック・ホームズの犯人捜しに記号論をあてはめたのは哲学者T・



ナウル島（ミクロネシア）で手工芸品を作る人。
材料の多くはヤシの繊維、サンゴ、甲骨など



2004 Tadashi Ishii
ヤシでできたバスケット(福岡県 海の中道)

A・シービオクだった。ご存知ホームズの推理は、ひとつの帽子の特徴から持ち主のさまざまな属性を割り出すというもの。仮説にもとづく「推測」、「演繹」、「帰納」を通じて記号を読み解いていく。考古学の方法もこれと同じだ。縁の欠けたモモの果核があるとする。古代人が薬用に種を取り出したものなのか。あるいはノネズミやリスが齧った跡なのか。それを推理し、実験で確かめる。こうした見えない情報ルートの読み解きが、ピーチコーミングの方法論にもつながってくる。

漂着物や収集物から、見慣れない種が出てくることがある。原産地がわかるかもしれない。そう思うと石井さんは、自宅の庭にそれを播いてみる。たまたま手に入れた種から、こうしてカニステルやバオバブなどが芽を出した。

ロビンソン・クルーソーは、砂浜に見つけた足跡から、島に生物がいるに違いないと考えた。これはシービオクによれば、「指標」という分類に

属する記号だ。石井さんも砂浜を歩いているとき、遠くの波打ち際にチラリと果実の皮の繊維が見えただけで、「あれはヤシや」と直感できる。

こうしてあるときはホームズ、あるときはロビンソン・クルーソーとなって、石井さんは漂着物の来歴はもちろん、自然や社会の潮流まで読み解いてきた。その研究は地元でも全国でも評価されている。一〇月三〇日から福岡県で開催される「第一九回国民文化祭」では、古賀市が漂着物をテーマに展示やシンポジウムをおこなう予定だ。

目下、石井さんの気がかりが二つある。ひとつはこの膨大なコレクションが将来どうなっていくのかということ。貝類や骨董品などは、収集家の死後に散逸してしまうケースも多い。自分の集めた漂着物もそうなるのではないかとすると、眠れない夜もあるという。

もうひとつの気がかりは、やはり環境問題だ。

「アオイガイ(カイダコ)の卵が孵化するまで揺りカゴの働きをする貝。雌のカイダコが石灰質の分泌物から自分で作り出す」は、ふつう十一月から十二月に漂着します。それがいまは四月か五月に流れ着く。温暖化の影響じゃないでしょうか。エチゼンクラゲのように、大量漂着する生物も気になります。生物種が絶滅



「漂着物には他の誰より目ざといんですよ。浜に出たら人が変わるといわれる(笑)」
浜歩き姿の石井氏

する直前には、爆発的に湧き出すことがあるといえますから」

渚の悲鳴、ジオアートの光

島国日本の原風景ともいえる海岸。それが各地で失われつつあることに警告を発しているのが、防衛大学の山口晴幸教授である。

山口教授は、一九九〇年から九七年まで全国の海岸環境を調査。九七年からは汚染の元凶である漂着ゴミを調査してきた。砂の汚染がもつとも少なかったのは、宮城の九十九鳴浜、島根の琴が浜など三四カ所の海岸だった。これをランク「I」とすると、もつとも汚染されているランク「VI」の海岸は、大都市や人口密集地帯を中心とする一九カ所。これらの海岸の砂は、一〇回洗浄してもヘドロで水が黒く濁るといいう。

山口教授によれば、汚染原因はいくつも考えられる。土地開発や森林破壊などによる土砂の流出、廃棄物の不法投棄、タンカー事故などによる重油汚染、海岸ゴミを集めて燃やす「浜焼き」、海岸でのバーベキューやサンオイルの使用など。とくに「浜焼き」は、プラスチックの焼却でダイオキシン汚染をもたらす可能性もある。九九年には海岸法が改正され、「海岸の適正な利用」が盛り込まれたが、まだ守られていないところも多い。

次に漂着ゴミ。山口教授は九七年から二〇〇一年までに七一八カ所の海岸を歩き、九二万個以上の漂着ゴミを拾って調査した。「観光客が集まる海岸だけは清掃されていても、人の住まない離島は管理ができない。ゴミは放置されます。発泡ス



2004 Hareyuki Yamaguchi
漂着ゴミで最も多い生活ゴミと漁具類



2004 Hareyuki Yamaguchi
環境ホルモンの原因にもなる医療廃棄物
(沖縄・国頭村)。

チロールが雪のように被っている浜、マングローブの根元までゴミが食い込んでいる浜もある。もう日本列島の海岸は、ゴミに埋もれてるんですよ」

ゴミの種類は、生活ゴミと漁具類が圧倒的に多い。現時点では排出者の特定も難しいため、責任の所在は明確でない。しかしボランティア・NGO・企業・行政・消費者の連携でゴミを減らす方法はいくつかある。

「たとえば壊れやすいプラスチック製や発泡スチロール製の漁具を作らないように、水産庁が基準を設ける。漂着ゴミになりやすい製品のメーカーや流通業者などが、ゴミ処理コストを一部負担する。観光・レジャー・運輸産業が協力して、格安の『離島清掃ボランティア・ツアー』を企画するといった方法です」と山口教授はいう。企業は消費者が製品やサービスを利用する期間だけでなく、使用後の取り扱いにも「その先の」製造者責任、事業者責任を分けもつ余地がある。CSRの一環として、今後検討すべき課題だろう。

さらに漂着ルートの問題もある。これは海流とほぼ一致する。漂着ゴミがもつとも多いのは長崎

の壱岐・対馬。山口教授がバーコードや商品ラベルを調べたところ、多くは中国のゴミであることがわかった。さらに日本海を北上すると、新潟あたりまでは韓国のゴミが増え、そこから北ではロシアのゴミが増えてくる。これら漂着ゴミの中には、環境ホルモンの原因となる医療廃棄物、化学薬品表示の入ったポリタンク、レジンベレット（細かなプラスチック樹脂の粒、オイルボール（廃油のかたまり）など）も含まれている。同様に日本から不法投棄されたゴミも、海流でグアムやサイパンなどへ運ばれる。

問題はゴミと一緒に、“Not in my backyard”（捨てるなら庭の外）という発想までが大洋を循環していることだ。海洋不法投棄は、まだ完全に規制する国際法がない。つまり合法的なゴミの投げ捨てが可能である。漂着ゴミのなから何十年も前の缶やボトルが出てくるのは、かつて大量に捨てられたゴミが海底から浮き上がってきたことを示している。

「とにかくあらゆる角度から、何重にも対策をめぐらすしかないんです」と山口教授はいう。そ



「水質基準だけでなく、砂の汚染や廃棄物などあらゆる面から海洋環境を考えるべき」と説く
山口晴幸教授

の一方で、まだまだ素晴らしい海岸線が残されていることも広くアピールしている。

「巨大海蝕洞門や化石連根など、海岸には不思議で面白いものがたくさんある。私はそれを自然の造形美、『ジオアート』と呼んでいます。奇抜な地層や地形、珍岩や奇岩に感動を発見するジオアート・ウォッチングを提案したい。それを全国に紹介する『ジオアート・サミット』も企画しています」。山口教授は今後の抱負をそう語る。

というわけで、ビーチコミングのビギナーに向けて二人の達人から引き出したアドバイスは、「ともかく浜辺へ出てみよう」だ。砂浜から海水浴客の足跡が消えるこれからの季節、漂着物たちが語る海洋地誌の世界を探索してみよう。その体験は波打ち際の光と影、想像力の苦痛と快楽の先にあるものを私たちに教えてくれる。

主要文献

『新編 漂着物事典——海からのメッセージ』
石井忠著、海鳥社、一九九九年
『漂着ゴミ——海岸線の今を追って』
山口晴幸著、文芸社、二〇〇二年
『自然と文化の記号論』
T・A・シービオク著、池上嘉彦編訳、勁草書房、一九八五年